

- 問1 縄文時代末期から弥生時代にかけて、大陸から伝わった稲作がいち早く開始されたと考えられている、現在の福岡県や佐賀県を含む地域はどこですか。 (2016年 奈良県公立入試 類似)
1. 関東 2. 近畿 3. 東北 4. 北九州
- 問2 佐賀県に位置する吉野ヶ里遺跡は、周囲を深い堀や土壁で囲んだ大規模な環濠集落である。このような集落が造られた当時の社会背景を説明したものとして、最も適切なものはどれか。 (2023年 佐賀県公立入試 類似)
1. 氷河期が終わり海面の上昇が激しくなったため、集落が水没しないよう高い防波堤を築く必要があった。
2. ナウマン象などの大型の獲物を効率よく捕獲するための罠として、村の周囲に深い溝を掘る必要があった。
3. 稲作によって収穫物の蓄えや土地・水をめぐる争いが集落間で発生したため、外敵から守る必要があった。
4. 大陸から仏教が伝来し、その寺院を保護するために宗教的な儀礼として堀を巡らせる必要があった。
- 問3 3世紀前半の倭（日本）において、邪馬台国の女王である卑弥呼が中国の魏に使いを送った背景と、その結果として得られたものについて説明した文として最も適切なものはどれですか。 (2015年 岐阜県公立入試 類似)
1. 後漢の皇帝から金印を授かることで、九州北部を中心とした小国の連合を強固なものとし、大陸との交易を独占しようとした。
2. 中国の魏の皇帝から「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡などを授かることで、自らの権威を国内に示し、統治を安定させようとした。
3. 仏教などの新しい文化や技術を取り入れるため、百済を通じて大陸との国交を樹立し、高度な官僚組織を構築しようとした。
4. 中国の唐から律令制度を導入するために遣唐使を派遣し、天皇を中心とした中央集権国家の仕組みを整えようとした。
- 問4 3世紀の日本において、30余りの小国を従えていた邪馬台国の女王は、中国の王朝である魏に使者を送りました。この女王が魏の皇帝から授かった称号として正しいものはどれか。 (2018年 福島県公立入試 類似)
1. 倭王武 2. 征夷大將軍 3. 漢委奴国王 4. 親魏倭王
- 問5 縄文時代末期に大陸から北九州地方へ稲作が伝来したことにより、その後の社会の仕組みはどのように変化しましたか。最も適切な説明を選びなさい。 (2016年 奈良県公立入試 類似)
1. 米を貨幣として使用する制度がすぐに確立し、中央集権的な国家が全国に一斉に誕生した。
2. 全国で狩猟や採集が完全に行われなくなり、全ての集落が移動をしない定住生活を同時に開始した。
3. 食料の保存が可能になったことで、蓄えの多寡による富の差や、土地や水をめぐる争いが生じるようになった。
4. 大陸との交易が独占されたため、各地の集落が独立したまま争いのない平和な時代が続いた。
- 問6 1世紀に倭の奴国の王が中国の後漢へ使者を送り、光武帝から金印を授かった背景として、当時の小国の王たちの目的を説明したものとして最も適切なものはどれですか。 (2023年 大阪府公立入試 類似)
1. 仏教などの新しい宗教を中国から導入し、国民の精神的な団結を図るため。
2. 遣隋使や遣唐使のように、進んだ律令制度を学び取り、日本独自の憲法を制定するため。
3. 中国の皇帝から地位を認められることで、自国の権威を高め、周囲の国々に対して有利に立つため。
4. 中国からの軍事支援を直接受け、近隣諸国を武力で一気に統一しようと考えたため。
- 問7 弥生時代の吉野ヶ里遺跡などに見られる、高い木材を組み上げ周囲に柵を張り巡らせた「物見やぐら」が作られた背景として、当時の社会状況を正しく説明しているものはどれですか。 (2016年 岐阜県公立入試 類似)
1. 天皇を中心とした中央集権体制が確立し、地方の豪族がその権力を誇示するために建設したため。
2. 稲作の普及により土地や水をめぐる争いが増え、集落を守るための防御機能が必要になったため。
3. 大陸から伝わった仏教の儀式を行うため、天に近い高い場所で祈りを捧げる必要があったため。
4. 高床倉庫に保管した穀物がネズミの被害に遭わないよう、高い場所で常に監視を行うため。
- 問8 九州北部の福岡県付近で発見された弥生土器に象徴される時代には、大陸から青銅器の技術が伝わりました。この青銅器の一つである「銅鐸」は、日本において主にどのような目的で用いられたと考えられていますか。 (2016年 長崎県公立入試 類似)
1. 豊作などを祈るための、祭りの道具
2. 武士が戦場で敵を攻撃するために使用した、実戦用の武器
3. 大陸との交易において支払いに使われた、和同開珎などの貨幣
4. 脱穀を行う際に使用する、千歯こきなどの農具
- 問9 弥生時代に作られた青銅器の一種で、釣鐘のような形をしており、表面に流水紋や当時の狩猟・農耕の様子が描かれていることがある、稲作の祭りなどに使われたとされる遺物を何というか名称を答えなさい。 (2020年 大分県公立入試 類似)
1. 勾玉 2. 銅鐸 3. 埴輪 4. 銅鏡
- 問10 弥生時代の文化を象徴する遺物である「銅鐸」について、その使用目的や出土傾向を正しく説明しているものはどれか。 (2024年 京都府公立入試 類似)
1. 豊作を祈るための祭りの道具として用いられ、滋賀県や和歌山県を含む近畿地方で多くの出土が確認されている。
2. 縄文時代から続く伝統的な風習において、死者を埋葬する際に手足に装着する装身具として使われた。
3. 最新の農耕技術を伝えるための工具として、兵庫県や島根県などの沿岸部のみで限定的に使用された。
4. 実際の戦いや狩猟で使用するための実戦的な武器として、東日本を中心に広く普及した。
- 問11 古代における農具の改良について、木製農具の先に鉄の刃先を取り付けるようになった目的と、その結果として生じた変化について述べたものとして、最も適切なものはどれですか。 (2016年 富山県公立入試 類似)
1. すべての農具を鉄のみで製造することで、木材資源の消費を抑え森林を保護した
2. 土を深く耕すことを可能にして農業生産力を高めるため、収穫量が増大した
3. 石包丁の使用を継続しつつ、木製農具の強度を補うことで穂首刈りの効率を上げた
4. 灌漑用水を確保するために、大規模な土木工事専用の石造りの道具を開発した
- 問12 弥生時代の集落が、縄文時代の集落にはほとんど見られなかった「濠」や「柵」といった厳重な防御施設を備えるようになった背景として、最も適切な説明はどれですか。 (2022年 沖縄県公立入試 類似)
1. 稲作の普及により、土地や水をめぐる集落間の争いが発生するようになったため
2. 集落内に川を引き込み、農作物の洗浄や生活用水を確保しやすくするため
3. 大陸との交易が活発になり、海外から持ち込まれた貨幣を保管するため
4. 仏教の伝来に伴い、寺院や宝物を盗賊から守る必要が生じたため
- 問13 3世紀の中国（魏）の歴史書には、当時の日本の様子が記述されています。邪馬台国の女王である卑弥呼が、魏の皇帝から授かった称号と品物の組み合わせとして正しいものはどれですか。 (2023年 岩手県公立入試 類似)
1. 漢委奴国王の称号と、金印 2. 倭王武の称号と、鉄剣 3. 征夷大將軍の称号と、刀や鎧 4. 親魏倭王の称号と、金印や銅鏡

答え合わせ・解説

問1	答え 4 北九州	朝鮮半島などの大陸に近い地理的条件を備えていた北九州は、新しい技術や文化の玄関口となりました。縄文時代末期には既にこの地域で水田稲作が行われていたことを示す遺跡が見つかっており、ここから日本列島の各地へと農耕文化が広がっていきました。
問2	答え 3 稲作によって収穫物の蓄えや土地・水をめぐる争いが集落間で発生したため、外敵から守る必要があった。	弥生時代に稲作が始まると、余剰生産物の貯蔵や、稲作に不可欠な水田・用水をめぐって集落間で利害対立が生じ、戦争が起こるようになりました。吉野ヶ里遺跡に見られる環濠や土塁、物見櫓は、敵の侵入を防ぎ、村を守るための防御施設として機能していました。
問3	答え 2 中国の魏の皇帝から「親魏倭王」の称号や多数の銅鏡などを授かることで、自らの権威を国内に示し、統治を安定させようとした。	当時の日本には文字による自国の記録がなかったため、中国の歴史書である『魏志倭人伝』が貴重な史料となります。卑弥呼は中国の三国時代における「魏」へ朝貢し、皇帝から認められることで、国内における政治的・宗教的な権威を高める狙いがありました。授けられた「親魏倭王」という称号や、当時の宝物であった銅鏡は、その権威を裏付ける象徴となりました。
問4	答え 4 親魏倭王	中国の歴史書『魏志』倭人伝には、239年に邪馬台国の卑弥呼が魏に使者を送ったことが記されています。魏の皇帝は卑弥呼に対し、魏と親しい倭の王であることを示す「親魏倭王」の称号と、金印や多数の銅鏡（三角縁神獣鏡など）を授け、彼女の支配権を国際的に認めました。
問5	答え 3 食料の保存が可能になったことで、蓄えの多寡による富の差や、土地や水をめぐる争いが生じるようになった。	稲作によって収穫された米は、それまでの狩猟・採集による食料とは異なり、長期保存が可能でした。これが余剰生産物としての「富」を生み、それを管理するリーダーの出現や、有利な土地を確保するための集落間の紛争、さらには身分の格差へとつながり、社会の構造を大きく変える要因となりました。
問6	答え 3 中国の皇帝から地位を認められることで、自国の権威を高め、周囲の国々に対して有利に立つため。	当時の日本（倭）は100余りの小国に分かれて対立しており、奴国のような小国の王は、強大な勢力を持つ中国（後漢）の皇帝に朝貢（貢物を届けること）して「臣下」としての形をとることで、自らの支配の正当性や地位を国際的に裏付けてもらおうとしました。福岡県の志賀島で見つかった金印は、このような当時の国際関係（冊封体制）の実態を象徴する資料です。
問7	答え 2 稲作の普及により土地や水をめぐる争いが増え、集落を守るための防御機能が必要になったため。	弥生時代には稲作が本格化し、蓄えられた食料や、稲作に適した土地・水をめぐる集落間の争い（戦争）が発生するようになりました。吉野ヶ里遺跡で見られる深い堀（環濠）や、高い場所から敵の侵入をいち早く察知するための物見やぐらは、集落を外敵から守るための軍事的な役割を果たしていました。仏教の伝来や中央集権体制の確立は、のちの飛鳥時代以降の出来事です。
問8	答え 1 豊作などを祈るための、祭りの道具	弥生時代に大陸から伝わった青銅器は、銅とスズの合金で作られていました。当初は武器としての形を持っていましたが、日本では次第に大型化・薄型化し、実際に使う武器としてではなく、集落の豊作や繁栄を祈るための祭りや儀式的道具（祭祀具）として発展しました。銅鐸は特に近畿地方を中心に多く発見されています。
問9	答え 2 銅鐸	大陸から伝わった金属器の技術により、弥生時代には青銅器や鉄器が作られるようになりました。銅鐸は近畿地方を中心に分布しており、初期のものは音を鳴らすための楽器のような役割でしたが、次第に大型化し、稲作の豊作を祈る祭祀（祭り）のための道具として用いられるようになったと考えられています。
問10	答え 1 豊作を祈るための祭りの道具として用いられ、滋賀県や和歌山県を含む近畿地方で多くの出土が確認されている。	青銅器はもともと大陸では武器や工具として使われていたが、日本に伝わると祭祀用の道具（祭器）として大型化・薄肉化した。銅鐸はその代表例であり、出土数の統計においても兵庫県、島根県、徳島県に次いで、滋賀県や和歌山県といった近畿圏で多く見つかったことが特徴である。
問11	答え 2 土を深く耕すことを可能にして農業生産力を高めるため、収穫量が増大した	鉄の刃先を装着することで、従来の木製のみの農具では難しかった硬い土壌を深く掘り起こす（深耕）ことが可能になりました。これにより土壌の養分が有効に活用され、農業生産力が大幅に向上しました。石包丁から鉄鎌への変化なども含め、鉄の普及は収穫量の増大と社会の余剰生産物の蓄積に直結しました。
問12	答え 1 稲作の普及により、土地や水をめぐる集落間の争いが発生するようになったため	弥生時代に水稻耕作が始まると、食料の備蓄が可能になる一方で、水利権や肥沃な土地をめぐり利害対立が生じ、集落間で武力を用いた争いが起こるようになりました。こうした「戦い」の時代の到来により、人々の生活拠点である集落を柵や濠で守る必要性が高まりました。
問13	答え 4 親魏倭王の称号と、金印や銅鏡	中国の歴史書（魏志倭人伝）によると、3世紀に邪馬台国の卑弥呼が魏へ使いを送り、朝貢を行いました。その際、魏の皇帝から「親魏倭王」という称号とともに、その証となる金印や100枚の銅鏡などの返礼品を授けられたと記されています。なお、1世紀（紀元57年）に後漢の光武帝から金印を授かったのは奴国の王であり、混同しないよう注意が必要です。